

第122回 令和7年11月12日（水）

「AIアクターについて。」

AIでつくられた俳優がハリウッドデビューするニュースがありました。どうしてもAIの人物像は造り物に見える壁（「不気味の壁」と呼ぶそうです。）のようなものがあつたのですが、ついにそれを越えたようです。

なにしろ24時間ノーギャラで働けますし、赤ちゃんから老人まで自由自在に演じられます。どんな過酷なスタントもできますし、セリフの覚えは一瞬で稽古は必要ないわけです。これは制作会社にとっても朗報この上ないですよ。スケジュール調整もいらないければ、2カ所バッティングしても出演可能なのですから。

俳優組合は猛反対。それはそうですよね、仕事を奪われてしまいますから。AIは俳優のデータを学習してできているのだから著作権の侵害だというわけです。

俳優は自分が出演している作品を公開しています。AIはそれを見て学習しているわけです。人間の役者さんでも同じことをしていると思います。例えば大工さんの師匠の技術を弟子が見て学ぶことは防ぎようがないですよ。知的財産権の解釈が問われていると思います。

映画でも、小説でも、音楽でもAIの作品が素晴らしければ人間にとっては良いことなのではないかと私は思います。ポイントはそれに対価をきちんと払うことではないでしょうか。いままでよりも数倍面白い映画ができれば、いままでどおり払うことに私は抵抗がありません。そのお金が知的財産の提供者に渡ればよいと思うのですが。俳優も働かなくても収入が増えていくわけなので悪くないと思います。

将来はこのAIアクターにはこの人のデータが混在しているとか、このAI小説にはこの作家の作風が活かされているなどの判定をする仕事ができるのかもしれませんが。その関係の訴訟もかなりおきるのではないのでしょうか。

世界が変革することを止めることはできません。いままでの産業革命がそれを証明していますし、だからといって世界から仕事が消えてしまうわけではありません。

AIを否定するのではなく、活用して豊かな未来が来るといいなと思います。本屋に行けば毎日新刊があふれているのは幸せです。私の「積ん読」がさらに増えていきそうです。